

第14回 教行信証に学ぶ会 講師:延塚知道先生 【ライブ版】

2022(令和4)年2月17日 会場 円徳寺

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

こんにちは。それでは最初に「三帰依文」を拝読しましょう。

人身受け難し、いますでに受く。仏法聞き難し、いますでに聞く。

この身今生において度せずんば、さらにいずれの生においてかこの身を度せん。

大衆もろともに、至心に三宝に帰依し奉るべし。

自ら仏に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意を發さん。

自ら法に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、深く経蔵に入りて、智慧海のごとくならん。

自ら僧に帰依したてまつる。まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にも遭遇うこと難し。我いま見聞し受持することを得たり。願わくは如来の眞実義を解したてまつらん。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏

講義 1

どうもこんにちは。この時期ようこそおこしくございました。制約があつて来られない方もいらっしゃるそうで、しかし講義録とか CD とかで皆さんお聞きくださっているということで、まあ責任を感じます。響流十方ですから、如来の眞実義に背かないようにお話をさせていただきたいと思います。

こんな状況なのですが、恐縮ですが自分のことを申し上げますと、二週間ほど前ですか、大阪の南御堂でお話をしてきましたし、それから一週間後には今度は東京にまいります。23、24、25と。この時期によく行くなあと思うでしょう。行かないとしようがない。ですから行きますし、三月に入れば金沢・小松・富山・高岡、それから北海道を回って九州にまた帰ってきます。ですから、私は、もしかしたら罹るかもしれないと思って、まあ、しかし各地で皆さん氣を使つてくださっておりますね。

特に、まあ、こんなこと最初から申し上げるのもあれですが、今、家内が白血病で家におることが最近増えてきて、つまり抗がん剤と抗がん

剤の間が長くなって、次の抗がん剤が打てないのです、なかなか体力が回復しないで。その間にコロナなると死んでしまいますので、だから、僕は帰る時にもものすごく気を使って、検査キッドを皆さん下さるから、その検査キッドで検査をしながら、家に帰ったらすぐに風呂に入って、そしてうがいをして、初めて家内に「帰りました」というようなことでやっておりますが、まあ、いたって元気です。まあ、そういう状況ですので、少しかっこよく言えば命がけでしゃべっていると。やっぱり、もうひょっとしたらと思うから、その都度、熱が入ってしまってお話をさせてもらっているのですが。

ここでも、今、「行の巻」ですね。それで、その、皆さんにちゃんと伝わっているかどうか反省をしております、特に少し急いで進まなければならないわけですから。そうすると、例えば今読んでいるところは龍樹、天親、曇鸞、これは七祖の中の『大経』の祖師たち。その後、道綽、善導、源信、源空。これは『観経』の祖師たちになるわけです。そういうふうにして、「行の伝統」を親鸞聖人がいろんな学問の方法を駆使して私たちに伝えようとしているわけです。ですから、それをきちっと読み取って、その「行の伝統」ということにちゃんと着地していなければ、皆さまに伝わりにくいことになる。

逆に言えば、そこだけ伝われば少しはしょって先に進んでもいいと、こういうふうに思いまして、反省してます。つまり、もたもたしてて何をやっているのかと怒られそうで、田畑先生に申し訳ないなと思って、この間から先輩たちの参考書を読むのですが、山辺・赤沼、『教行信証講義』ですね。それから星野元豊先生の講義がありますね。それから私たちの方から言えば金子大栄先生の教行信証の講義がありますので、そういうものを読んでみるのですが、どの先生も親鸞聖人のそういう引用の仕方とか、そういうものについて一切言及しないで、「ここは龍樹の名号讃嘆の文章である」、「ここは曇鸞の名号讃嘆の文章である」、「ここは善導大師の名号讃嘆の文章である」ということで、言葉の解釈と言うか、文章の解釈だけに終わっているわけです。

それは名号讃嘆だと言えば行の巻ですから、七祖全部、『安楽集』にしろ、『観経疏』にしろ、『選択集』にしろ、名号を誉めている文章を引用しているに決まっているわけです。だから僭越な言い方をすると「これでは読んだことにならないのではないか」とこう思うわけです。ところがその先生方は素晴らしい学識をもった、実は私などが足元にも及ばないほどの学者たちばかりです。そう思うとなぜなのかというと、やはり時代の枠組みがあるわけです。遂最近まで、ここで何度か申し上げましたように、学問の伝統、東も西も同じなのですけれども、「宗祖がなぜ七祖を選んだか」という理由について末学が詮索する資格はないと。「宗祖がおっしゃったことをありがたくいただくべきである」。これが大きな枠組みなわけです。

そうすると「『教行信証』でどうしてこう言う文章を引用するか」とか、「なぜこんな引用の仕方をしているか」なんていうことを考えてはいけなかった時代だったわけです。ところがそれがだんだん薄れて来て、わたしくらいまでになると自由になって、安居と言う場所でも私のような末学が、それこそ自分の勝手なことを言って、今まで先輩が考えて来ていないようなことを発表するわけです。昔だったらこれは異安心で、たぶん遠流に処せられるか死罪ですね。というように学問にはその時代その時代の枠組みがある。大きな枠組みがある。

龍樹と天親はインドの人です。お釈迦様が亡くなって700年くらいして龍樹はお生まれになった。そしてそれから100年くらいして世親が天親菩薩がお生まれになって、お二人ともこれインド人です。ですからインドでは大乘仏教をあらわす時には何度も申しましたように「大乘の菩薩道」としてあらわすという枠組みがあるから、龍樹も天親も『大経』を読んでも『大経』を「菩薩道の経典」として読んで、「菩薩道の論書」として書いている。

ところが今度は、それから600年程して中国にわたると、今度は中国ですから、全く伝統も文化も違いますね。そして時も600年も経っているわけです。曇鸞が出て来られて註釈をされるわけですね。その時に、お釈迦様が亡くなって500年くらいは「正法」であるという「末法思想」がありますね。ですから500年以降、今度は1000年の間は、今度は「像法」の時代で、教と行があっても証がない時代である。こういうふうになってくるわけです。そうするとちょうど世親菩薩の後ぐらいから「末法」が近くなって来る。

そうなってくると経典で申しあげると『大経』は早く編纂されていますけれども、『観経』はこれは天親菩薩は読んでいない。ですから天親菩薩の後から「末法の時代」が到来するという不安で「これからどうなるであろう」と、こう言うことが中国ですいぶん問題になってくるわけです。今まで隆盛を極めていた仏教もだんだん衰えて来て、そして疫病は流行するは、あるいは震災あたりの天変地異は起こるは、今もそうですね、それから最近特にみなさんお気づきだと思いますが、このコロナの影響もあるのでしょうか、凶悪な犯罪が多くなって、しかもその理由がよく分からない。我がまま勝手なことばかり言って他人を殺していくということが起こってくる。そういうふうになってくると、これ一体どうなるだろうかという不安で、そして『観経』はそのころに、つまり300年を過ぎたころにトルファンあたりで、西域です、インドから越えたところあたりで編纂されたのであるというふうに言われています。その理由は『観経』は「定善十三観」という観法が中心になっていますね。トルファンあたりでは、その観法を中心にした経典がたくさん編纂されて、その頃ね、それと同じように『観経』もトルファンあたりの観法の集大成として「第十三観」のところが編纂されているのだというふうに、これまでの学者の先生がおっしゃっています。なるほどなあと思っておりますけれども。

ところが、皆さんもご存知のように「散善」になってくると、今度は「上品上生」から「下品下生」というのが出てきますね。これは完全に中国の思想なのです。だからトルファンあたりで編纂されて、そして中国あたりで出来たのではないか、完成したのではないかというので、今、藤田宏達先生あたりは、今申し上げたように300年から350年くらいの頃にトルファンあたりで編纂され、そして中国の思想が入って来ている。インドではないと言っています。けどもちろんインドに起源を持っている。なせかというと「王舎城の悲劇」が「序分」にあるから。だから当然インド出発であったとしてもトルファンかあるいは中国あたりで完成したのではないか、それが300年から350年くらいだと言われているわけです。

そしてその頃から中国ではこの『観経』が爆発的な人気を博して、今言った時代の様相の中で、『観経』は、それこそ凶悪事件が起こるわけです。家族の中で起こるわけです。それはみんながもう不安にあったそういう問題が、まず「序分」にとらえられていて、そしてそういう人たちが助かっていく教えだということで中国で爆発的な人気になっていく。丁度曇鸞大師がお生まれになる少し前です。だから曇鸞大師の『論註』は『観経』を

読んで、そして『観経』の「時機」の自覚、時代と機、人間の愚かさ、そういうものに焦点を当てて天親の「菩薩道の論書」を「凡夫の仏道」に転換していったということになります。そして『観経』を中心にして、道綽、善導と言うふう展開をしていくわけですね。

はっきりこの際ですから申し上げますが、浄土教の行は、親鸞聖人が「**大行とは、すなわち無碍光如来の名(みな)を称するなり。**」(東聖典157頁、西141、島12-6)から始まりますね。ですから浄土教の行の起源は『大経』にある。私、ちょっと最近頭がぼけているのか、ふっと「大行とは無碍光如来の名を称する」だったか、「無量寿如来の名を称する」だったかなあと、ふっと勘違いしそうになりまして、その時にふと思ったのは、ああ、「大行とは、無量寿如来の名を称するなり」と言う方がよくわかる。例えば、『大無量寿経』、『観無量寿経』なのですから、『大経』、『観経』をおさめて、「無量寿如来の名を称する」のだと言った方が妥当なように思うわけです。

ところがそうではなくて「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」。それは、誰が何と言っても「**世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来**」(「願生偈」)、あれに由っている。これはそうですね。ですからこれまで勉強してきたことから言うと、『大経』の大切な阿弥陀如来の名を無碍光如来と言って、「**世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来**」と、こういうふうに言って下さった世親菩薩。それが一番大切なのだということにすぐ思うわけです。

ところが、これまで私がお話ししてきたように、「行の巻」を開けると、世親の『浄土論』のその部分だけはカットしてる。「我依修多羅」からしか引いていないわけです。それはなぜか、そうですね、私が何度も申し上げたように龍樹と天親は一人の人と見ているのが曇鸞だと申し上げましたね。東聖典166ページ、167ページのところです。そして「**世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国**」の大切なところをカットしてしまって、それを龍樹菩薩の「弥陀章の偈頌」で代用している。そういう引用の仕方になっているわけですね。

なぜ「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」と言っているのに世親菩薩の一番大事な部分をカットしたのか、大問題ですね。皆さんどう思われますか。そこを明確に言わないと行としての視点が欠ける。僕が「龍樹と天親を一人の人として見ました」といいました。これはそうなっている。けど、なぜそうなっているのか、行として見た時にそれがどういう意味があるかということちゃんと着地させないと、皆さんに伝わりにくいと思って、まあ少し悩み考えて、というか直感で僕はわかったのですが、龍樹、天親を一人の人と見たというのは、はっきり申し上げると、インドの菩薩、龍樹、天親はインドの菩薩道を明らかにした菩薩である。これは間違いないですね。そして、すべての大乘仏教は龍樹が諸祖になりますから、ところが、うまく伝わりますかね、世親の「**世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来**」を残すとそれが大行の根拠になります。当然ですね。そうすると『教行信証』は「菩薩道の行」なのかと、こうなってしまうのです。分かりますかね。『教行信証』はあくまでも、「大乘の菩薩道」の体系に対して、凡夫が凡夫のままで救われるという「凡夫の仏道」を明らかにしていくと言うのが親鸞聖人の意図ですね。

だから世親の「**帰命尽十方 無碍光如来**」を残すと、それが『大経』の根拠だということになってしまうから、となると親鸞聖人の言うことは菩薩

道なのかと、こういうふうには誤解を受けてしまう。だから世親のところの大切な「**帰命尽十方 無碍光如来**」を、あえて消した。消しました。そして「**世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国**」、これは世親の『浄土論』を見る限り、「世尊我一心」、「お釈迦様、大聖釈尊よ、私是一心にあなたが**お説きくださった『大経』の尽十方無碍光如来に帰命します**」。そして「**お説きくださった安楽国に生まれたいと願います**」。こう言う表明ですから、「行」というよりも、今の言葉で言えば「**信仰告白**」になりますね。「**信心の表明**」になりますね。

唯すごいのは「**信心の表明**」がそのまま「**ご本尊**」になっていること。「**帰命尽十方 無碍光如来**」、「**信心が如来である**」とおっしゃっていることになりますね。ここに世親菩薩のすごい表明があるのです。つまり、後に「**世尊我一心**」が「**行**」、「**帰命尽十方 無碍光如来**」が「**信**」。「**行信不離**」であるとかいうふうにも言うこともできるし、あるいは「**信心こそが如来である**」とかいうふうにも言うこともできます。ですから親鸞聖人は「**竊かに以みれば、難思の弘誓は難度海を渡する大船、無碍の光明は無明の闇を破する恵日なり。**」(「総序」)から『教行信証』は始まりますね。あれは「**信心の表明がそのまま如来である**」というふうには世親のこの表明を継承しているわけです。つまり『大経』の**信心の表明**を継承しているわけですね。その限り、これはあくまでも「**信仰告白**」であって「**行**」と言うまで成熟していない。よく読むと、世親の『浄土論』を読むと「**止観行**」が中心になっていきます。

心をとどめて、そして浄土の阿弥陀仏にまみえて、善男子善女人が浄土に生まれて行って、浄土で阿弥陀仏に遇って、そして菩薩に生まれ変わって、そして浄土に生まれるまでの「**自利**」と、浄土から菩薩になって、今度は「**利他**」として教化をしていく。「**自利利他**」が実現していくのが阿弥陀仏に遇う「**見仏**」なのだというふうには、「**止観行**」を中心に説かれるのが世親の『浄土論』ですから、そういう意味では、これ(「**世尊我一心**」)は直接的には「**信仰告白**」であって「**行**」であるというふうにはまだ成熟していないとみられます。それを「**行**」であると確定したのは曇鸞大師です。

曇鸞大師は皆さんご存知のように聖典168ページの真ん中のところから、二道釈が終わって、題号釈が終わって、その後、「**また云わく、また所願軽からず。もし如来、威神を加せずは、まさになんをもつてか達せん。神力を乞加す。このゆえに仰いで告げたまえり。「我一心」は、天親菩薩の自督の詞なり。言うところは、無碍光如来を念じて安楽に生まれんと願ず**」(西155～、島12-16～)。「**世尊我一心**」と言った「**我一心**」は天親菩薩の**信仰告白**の言葉である。こういう意味です。そして**信仰告白**の言葉であるけれども、それをもう一度言い直すと、その**信仰**の内容は「**無碍光如来を念じて安楽国に生まれんと願ず**」と。こういうふうには世親菩薩は**信仰告白**して下さったのだと。そして「**心心相續して他相間雑なし**」。それがずっと一生続いて他の思いがない。そういう「**他力の信心**」こそ「**我一心**」であると曇鸞大師は言いたいわけです。人間の心はいつも変わるけれども「**我一心**」は変わらない。死ぬまで浄土に生まれたいと言うのは変わらないのですよと。

ここで切って、その次に世親菩薩が**信仰告白**をした「**帰命尽十方無碍光如来**」は、「**帰命**」はすなわちこれ**礼拝門**なり、」というふうには、ここか

ら皆さんご存知のように、ここまでは信仰告白ですから、「我一心」の告白です。ところがこの後から、曇鸞大師は「五念配釈」という作業をされます。「五念配釈」というのは、これは世親菩薩が「願生偈」の下巻の方に、「願生偈」の歌だけではよくわからないから、この「願生偈」の歌はどんな歌であるかということ解説するために『浄土論』の下巻に、お東の聖典で言いますと138ページ、少し学問的で大変恐縮です。けど大事なところですので、ここに下巻が始まりますが、「無量寿修多羅の章句、我、偈誦をもって総じて説きおわんぬ」。下巻と言うよりも長行(じょうごう)、論文の部分です。上巻と下巻と別れているわけではなくて、歌の部分と論文の部分と分かれているから、長行、つまり論文の部分ですね。それが始まりますが、まず第一に、「論じていわく、この願偈は何の義をか明かす。かの安楽世界を観じて、阿弥陀如来を見たてまつり、かの国に生まれんと願ずることを示現するがゆえなり」。わかりますね、「願生偈」と言うのはどんな歌かと言うと、それは浄土に生まれて阿弥陀仏を観ると、そのために願生するという歌だと。ここから始まります。

そしてどのように観て、どのように信心を生ずるのかと。世親菩薩が「いかんが観じ、いかんが信心を生ずる」と。こう問いを出して、それに対して「もし善男子・善女人、」菩薩ではありませんよ。善男子善女人が五念門を修めて、その行が完成すれば、究極的に安楽国に生まれて、かの阿弥陀仏を見たてまつることを得るといふことが起こるのだと。そうすると「五念門」と言うのはここに初めて出てくるのですが、「五念門」とは何の行なのかというと、「なんらか五念門。一つには礼拝門、二つには讚嘆門、三つには作願門、四つには観察門、五つには回向門なり」。こういうふうになって初めてここに「五念門」と言うものが出てきます。これは西藤さんの学習会で『論註』を勉強していますから、その時に詳しく申し上げているところなのですが、この「五念門」と言うのは、「礼拝」、「讚嘆」、「作願」、「観察」、「回向」の五つの行だと、こういうふうに出てくるわけです。

私たちには「ややこしいことを言うなあ」と思いますが、もう時間がないので、はっきりと申し上げますと、曇鸞大師は、これは五つ別々にあるように見えるけれども、要するに念仏のことだと。全部合わせて。念仏するということだと。そう思うと確かにそうですね。皆さんどうですか、普通の生活の中では、人に頭を下げるというのはなかなかできないでしょう。挨拶では「こんにちは」と言って頭を下げますが、何かちょっとムカツとすると腹が立って夜眠れない、なかなか頭が下がらない、夜寝られないでしんどいなあと思いつつ、「ああ、僕が悪いんだ、私はなんと我が強いんだろう」と思って、馬鹿だなと思う。仏法を聞いているからね。

こんなふうにしてなかなか頭を下げるということもできない。菩薩は夜三時、昼三時必ず礼拝する。夜中でも起きて礼拝するのよ。ところが私たちに礼拝なんて起こらない。ところがよく考えると「南無阿弥陀仏」というふうに頭が下がった時だけは確かに礼拝している。さっき言ったように自分はなんと我が強いのだろう。ああ本当にだめな奴だと思いつつ、初めて、ああ仏様の教えが正しいと思いつつ、「南無阿弥陀仏」と初めて頭が下がる。だから念仏する人のところに礼拝ということが実現しますよと。人を誉めるということもなかなかしませんね。けど僕はまあ今までたくさんの人に

会ってきましたが、自分の先生を誉める時の顔はいい顔して褒めるね。「仏法の先生に遇った」と言う時には本当に褒めてるよね。けども「お宅のボンちゃん東大に受かったそうで、それはおめでとうございます。立派ですね。」と言う時には、なかなか頭が下がらんのや、半分しか(笑)。そういう人間が初めて手放しで褒める、そういうものに遇ったと言うのが念仏ですよ。師を褒め、お釈迦様を褒め、教えを褒め、ということが起こりますよ。

さらに金や地位や名誉しかない人間に初めて浄土というところが開かれて、「私は浄土に生まれたい」と。「もうこの娑婆はしんどい」と。「もうこの娑婆で色々やっとなつて、それは多少楽しいことはないわけではないけど、もう疲れた」と。「どうでもいい」と。「それよりも無量寿という感動をいただいて浄土に生まれる者になりたい」。初めてそういうことを思う。

曇鸞大師は、実はここ(「作願」)までが、私たちの念仏者を実現する行。「観察」、「回向」も世親の『浄土論』では菩薩ですから、自分が浄土を観察して阿弥陀仏を観るといふ、全部これは世親の行になっているわけです。ところが曇鸞大師の『論註』を読むと、ここ(「観察」)からは、観察門といふのはわかりますね。清浄功德、量功德、性功德と展開していく浄土の莊嚴になっていきます。浄土の莊嚴になるところを見るとわかるでしょう。「仏本何が故ぞ此の莊嚴を起したもうや」と問うて、仏様が何で浄土を建てたのかと問うて、ある国土をみそなわすと人間があほみたいな生き方をしているから、かわいそうだと、それではあんまりだと、蚕のような生き方をしている、尺取り虫のような生き方をしている。それを見てあんまりにもかわいそうだから、浄土に生まれなさいと言って、浄土を建ててくれたのだと、いうふうに「観察」しているのは仏様の方になります。「観察」しているのは仏様の方です。全部浄土の莊嚴はそうになっていますでしょう。だから仏様の方が私たちの馬鹿な生き方を見てかわいそうだと、何とかして助けてやりたいと思うから浄土を建てたのだと、こう言うふうになっていく。そしてその浄土を私たちに手渡すために、「回向」するために「念仏の行」を私たちに「回向」して下さった。というふうに、ここは「仏様の方の行」になるのが曇鸞の『論註』の特徴です。

親鸞聖人はそれを引き受けていますから、これまで何度か注意しました。『観無量寿経』というと「私たちが無量寿仏を観察する」とこう読めるし、それが普通の常識です。ところが親鸞聖人は全部「無量寿仏観経」と呼んでいる。「無量寿仏が観察して」、そして私たちを救うために浄土を建てて下さったんだというふうに、ここ(「観察」)からは仏様の仕事にしている。しかしいずれにしても、私たちが念仏し、礼拝・讃嘆・作願したところに仏様方の浄土が回向される、念仏の行を私たちに手渡して下さって、この全体で私たちを救うという行なのだといふのが「五念門」なのです。ですから一言で言えばこれは念仏。念仏の中に全部含まれている。わかりますね。

この中で南無阿弥陀仏と頭が下がった人は、この世の愚かさを知らされて「ああ、仏様の世界がある」ということがはっきりと教えられて、そして仏様の世界に生まれたいと思う。だから曇鸞の場合はここ(「観察」)からは正確に言うと仏のはたらきですが、念仏は私たちの行であると同時に仏様のはたらきがこもっているから、私たちが救われるのであって、だからこの「五念門」は一言で言えば念仏なのですということです。その念仏の

行を曇鸞大師が世親の『浄土論』に配当するのは。「帰命」は「礼拝」です。「尽十方無碍光如来」は「讚嘆」です。「願生安楽国」は浄土に生まれたいと願う「作願」です。こう言うふうに配当していきます。そしてここに「浄土の二十九種莊嚴」が説かれるところ。ここは「観察門」にあたりますよと、最後に「普くもろもろの衆生と共に、安楽国に生まれんと願ず」という一句、「願生偈」の最後、それは「回向門」ですよというふうに、下巻の念仏の行を上巻の「願生偈」に配当してしまう。つまり上巻の歌は全部念仏の歌なのですよと。念仏からひとつも外れません。その全体は「一心」と言う信心に包まれているのですよと。こう言うふうにして「願生偈」の全体を「信」と「行」と「念仏」、「信心と念仏の歌」に変えてしまう。その時に、「帰命尽十方無碍光如来」がはっきりと「行」という意味を持つこととなります。もともとは「信仰告白」であったものが、曇鸞のお仕事によってはじめて「行」という意味を持つこととなります。

もう一つ大切なことがあります。「行」という意味を持つこととなりますが、何度も申し上げましたように世親の『浄土論』は「菩薩道」なのですが、曇鸞の場合は「凡夫が救われる行」に転換していますから、だから「帰命尽十方無碍光如来」は、これは「凡夫を救うための行」というふうに決定的に決定づけた人は曇鸞です。もともと信仰告白であったものを曇鸞が、これは「『大経』に根を持つ行である」というふうに決定するのが曇鸞の『浄土論註』です。ですから世親の「願生偈」の方を採用すると菩薩道の行になってしまうから、そこを抜いて、そしてあえてここでは曇鸞の五念配釈の方をきちっと持ってきているわけです。そういう意味でなぜそうなっているのかというのは、今申し上げた理由です。整理しますと世親の信仰告白をそのまま行にする菩薩道に間違えられてしまうから曇鸞の五念配釈の行の了解に立てば凡夫が救われる行だという意味になるから。だから世親のところはあえてはずして曇鸞の五念配釈の文章を、それをあえてここで持ってきている、「帰命尽十方無碍光如来」は、「帰命」はすなわちこれ礼拝門なり、「尽十方無碍光如来」はすなわちこれ讚嘆門なり」。そしてなぜ帰命が礼拝かという説明をして、そして尽十方無碍光如来、これは讚嘆門かという、169ページのところに入っていきますが、少し飛ばしますが、「帰命は(必ず)これ礼拝なり」。南無阿弥陀仏と言って帰命したときには必ず五体投地して礼拝するということが起こる。

しかし礼拝するだけだったら挨拶でも礼拝するから、礼拝だけだと仏様に帰命したということにならない。そういう意味で帰命の方が礼拝より重いのだと。帰命は重いんだと。だから「願生偈」の歌は世親菩薩の本心、自分の本心を述べた歌だから、ここでは「帰命」と自分の心を表明しているのだと。しかしこれは広く言えば「礼拝」ということですよと。だから「論」に偈義を解するに、ひろく礼拝を談ず。『論』の論文の部分になると、少し「帰命」をひろめて「礼拝」と言っているのです。皆さん言っていることわかるでしょう。僕はこれは説明するとそう言うことかと思うかもしれないけど、お寺に来て、「さあ、みなさん帰命しましょう」とは言わないでしょう。「みなさんみんなで礼拝しましょう」と言うでしょう。それは帰命している人もしてない人もいいのだと、礼拝しなさいと。礼拝の方が広い意味を持つからね。「頭を下げましょう」と言っているだけの話しです。

ところが頭を下げただけでは、本当に帰命しているのかしていないのかわからない。だけど世親は、だから歌のところでは自分は帰命している



のだ、阿弥陀如来に帰命しているのだと言っているから、帰命の方が本当は重いんだけど、もうちょっと広く行として言う時には礼拝の行だと。こういう意味ですよと言って、「彼(ひ)・此(し)あい成ず」、歌と論文とがうまくその意味を照らし合わせて「義においていよいよ顕れたり」。その意義を、つまり、阿弥陀如来に帰命するということはどういうことかと言うと、広く言えば礼拝だけでも、気持ち、命をかけて帰命する。こういう意味なのだと言うのが帰命の説明です。

それからその次に、「何をもってか知らん、「尽十方無碍光如来はこれ讚嘆門なり」とは」、とこうあって、「下の長行の中に言わく」、「世親菩薩がちゃんと長行の中にこう言っています」と言って世親菩薩の文章を引用します。それはどのように讚嘆するかというと、「かの如来の名を称す」。阿弥陀如来の名(みな)を称す。「かの如来の光明智相のごとく、かの名義のごとく、実のごとく修行し相応せんと欲うがゆえに」と世親菩薩が言っています。天親は今、尽十方無碍光如来とおっしゃっています。だから「すなわちこれ、かの如来の名に依って、かの如来の光明智相のごとく讚嘆するがゆえに、知りぬ、この句はこれ讚嘆門なりとは」と。

これが曇鸞大師の註釈なのですが、これはなかなか難しいね。曇鸞大師流に註釈しますよ。これは「菩薩の行」として言う時にはどのように讚嘆するかというと、如来の智慧に即して讚嘆するのだと、それから如来の名義、名の意義に即して讚嘆するのだと、そして「実のごとく修行し相応せん」というのは、ここが難しい。これは菩薩しかできないのですが、これは法と相応するのだと。それによって法と相応するのだと。こういう意味で、いかにも菩薩行の表現なのですが、曇鸞流に註釈しますよ、解釈しますよ。皆さん名号に遇うと言う時には如来の智慧の光に遇いますね。「光明智相のごとく」、これはここでも何度も申しましたように、人間は人間の愚かさに気づくことはありません。偉いと思っている、どこかでね。自分は偉いと思っているからちょっと傷つけられると腹が立つ。それが仏様の教えに遇った時に、偉いと思っていることの全体がどんなに愚かなことかと。人間がわからないことを先に見抜いて教えて下さったのが本願の教えだったと。「ああ今まで偉そうに生きてきたのは大変申し訳なかった」と、初めてそこで五体投地して懺悔する。「凡夫でした、申し訳なかった」と言って頭を下げる。これ光明智相のごとくという意味です。

ところが頭を下げたものが、実は、そのまま救われていくということがあるでしょう。頭を下げた途端に気が付いたら、自分の自我を中心とする世界から仏様を中心とする一如の世界に生まれていったという感動があるでしょう。それが「名義」です。名号に込められている意義です。どういうことかと言うと、『大経』を読むと法蔵菩薩が一切の衆生を救うために、どうしたら救えるか。全部自分勝手なことばかり言って自分一人で苦しんでいる。何とかして救わなくてはならないのですが、どうして救うか。その時に、自力を募らせて、自力に行き詰らせて、そして「自力では救われないということを知らせないとしょうがない」ときつと思ったのでしょね、仏さんが。だから第19願は自力を尽くしなさいと、自力を尽くして頑張りなさいと、やらしておいて初めて18願の世界で包んで救っていくと。そのままを救っていく。そういう本願の名号の意義が『大経』に長く説かれている。法蔵菩薩の御苦勞のことです。わかりますね、それが「名義」です。本願の名号に込められている意義です。

混乱してはいませんが、『大経』ではない南無阿弥陀仏もいっぱいあるわけです。修行の念仏とか、そんなところでは法蔵菩薩なんて何も問題になりません。私たちが法蔵菩薩と同じように修行をしなくてはならないということで。ところが今言ったように名号が凡夫を救うために本願を建て、その本願によって凡夫を自力から他力に目覚まして、そして目覚めた者をそのまま救っていくという意義がもう仏様の方で準備されている。それが「名義」です。

ですから「光明無量と寿命無量」と言ってもいい。まず教えに遇って光に当てさせて、凡夫であるということに目覚めさせて礼拝が起こる。その者をそのまま救いにとっていく。それは仏様の方で準備した意義によって救うから「名義」ですね。そんなふうに曇鸞大師は「南無阿弥陀仏の教えに遇う」ということは「光に遇う」ということと、それから「法蔵菩薩の御苦勞によって救われる」のですと。それだけのことです。それだけのことをこの文章に読み込んで、そして「帰命尽十方無碍光如来」、これが私たちの行なのですと。だから帰命するということによって懺悔を起こし、光に会い、尽十方無碍光如来の世界を開いてくださる。それは『大経』にちゃんと仏様の方が準備していると説かれているのが、この「帰命尽十方無碍光如来」という行なのですよと。凡夫が救われる行なのですよとやることをはっきりと明確に示してくださったのが曇鸞大師です。

ですから曇鸞大師のところの帰命尽十方無碍光如来、これを『大経』の行として親鸞聖人は採用したいために、あえて世親菩薩の方ははずして、この曇鸞大師の方の「五念配釈」の方をここに持ってきて、これこそが私たち凡夫を救う『大経』の行なのですよとやることをわかってほしいために、こういう引用の仕方をしたのだというふうに了解してください。わかりますか？言っていることわかりますね。わかりますね。もうちょっと感動していいとこなのですが(笑)…。

質問…ちょっといいですか。今書いているうちにわからないようになったのですが、世尊我一心帰命が礼拝と言われたでしょう。五念配釈で。そして尽十方無碍光如来が讃嘆と言われて、願生安楽国が作願と言われたのですが、あとの観察と回向というのは、どれなのでしょう？

先生…あなた(西藤)のところでお話した時にちゃんとお話をしているのです。この「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」の後に、「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」という、こっち(世尊我一心～)は「帰敬序」、こっち(我依修多羅～)は「発起序」と二つあって、その後に「観彼世界相～」というふうに、「かの世界の相を観ずるに、三界の道に勝過せり」というふうに、世親菩薩の「願生偈」の歌が始まりますね。「願生偈」を開けてごらん、135ページです。「世尊我一心 帰命尽十方 無碍光如来 願生安楽国」、これが「帰敬序」ですね。そして「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」、これが「発起序」です。ですから世親の『浄土論』は、この「我依修多羅」から引いている。「帰敬序」をカットして、167ページです、そのカットした理由は今申し上げた通りです。それはいいですね。そうすると、この「我依修多羅 真実功德相 説願偈総持 与仏教相應」ということが終わると、この次から浄土の莊嚴が始まります。

「観彼世界相 勝過三界道」、これが「清浄功德」。「究竟如虚空 廣大無辺際」、これが「量功德」。「正道大慈悲 出世善根生」、これが「性

功德」。「浄光明満足 如鏡日月輪」、これが「形相功德」と言うふうに、ここから二十九種莊嚴がずっと歌われます。そこが「觀察門」。それがずっと歌われて、いいですか、138ページの2行目まで、ここまでが浄土の莊嚴になります。「国土莊嚴」が17種類、「仏莊嚴」が8種類、「菩薩莊嚴」が4種類ですけれども、浄土の二十九種莊嚴がここまでで説かれます。

もうちょっと説明しましょうか、「国土莊嚴」が136ページの一番最後、「衆生所願樂 一切能満足」、ここまでが国土莊嚴になります。ここまでが国土莊嚴ですから、ここまでに国土莊嚴が17種類歌われます。ですから「国土十七種莊嚴」と言われるところです。いいですね。

その次から「仏莊嚴」が始まります。137ページの2行目、「無量大宝王 微妙浄華台」、ここまでが「座功德」。「相好光一尋 色像超群生」、これが「身業功德」、身、如来の身です。如来の座っている座、これが蓮華ですが、蓮華がまず歌われる。その次に如来の身が歌われます。その次に「如来微妙声 梵響聞十方」、如来の微妙の声、梵の響き十方に聞こゆ。これが南無阿弥陀仏の事です。南無阿弥陀仏は浄土からの如来の名のりです。私たちが南無阿弥陀仏と言っていますが、それは、ひょっとしたら皆さんの仏様が浄土から名のっているのかもしれませんが。如来の名のりなのですから。そんなふうには、「座功德」、「身業功德」、「口業功德」、「心業功德」、「大衆功德」、「上首功德」、「主功德」、最後によく問題にされる「観仏本願力 遇無空過者

能令速満足 功德大宝海」、ここまでが「仏八種莊嚴功德」、仏の莊嚴が八種類説かれます。だから、「不虛作住持功德」が仏の莊嚴の最後になります。

その後、仏を観たのですから、今度は菩薩が生まれて来て、「安楽国清浄 常転無垢輪」から始まって138ページの、「何等の世界にか、仏法功德の宝ましまさぬ。我願わくはみな往生して、仏法を示すこと仏のごとくせんと」。ここまでが「菩薩莊嚴四種類」になります。いいですか。ここが国土十七種、仏八種、菩薩四種の浄土の莊嚴ですから、ここが「觀察」に当たります。その後、「我作論説偈〜」、「我論を作り、偈を説きて、願わくは弥陀仏を見たとまつり、普くもろもろの衆生と共に、安楽国に往生せん。」という、この世親の歌を「回向門」と、「回向」というふうにあてます。

これは、「この歌全部を皆さんに捧げたい」と、そして「皆さんと共に安楽国に往生したい」という世親の「回向の行」になるわけです。菩薩の最後の行になるわけです。ですからここを「回向」に当てます。ですから「菩薩行」として見ると「礼拝し、讃嘆し、作願をして、浄土を觀察して、菩薩になって、最後の回向門で利他行を確立する」というふうにして、この「五念門」は「菩薩の行」という意味を持つわけです。『浄土論』ではね。

ところがそれは、『浄土論』ではひとつひとつばらばらの菩薩の行のように見えるけれども、これは、実は「念仏行」なのですよと言ったのが曇鸞大師です。ですから曇鸞大師はこれを、歌を全部配当して、「五念配釈」と言うふうに配当して、「信」と「行」とが離れない、「初めから行信ひとつ」という、それが「『大経』の行」ですよ、その中で特に中心になるのは「帰命尽十方無碍光如来」、これが念仏を顕す言葉になりますよと、こういうふうに曇鸞大師がきちっと行として確立させた。その時に、行として確立するとき、「凡夫が救われる行」として確立させたのが曇鸞大師だから、

だから曇鸞大師の方にその功績を与えて、世親菩薩の方はあえて削ってしまうというやり方で、私たちに「大乘と言うのは凡夫のまま救われる行なのですよ」と。特に、私たちが凡夫のまま救うのは「無碍光如来の名を称する」ということです。これが「大行」なのです。というふうに親鸞聖人が「『大経』の行」を規定していると思われるのです。そのような引用の仕方をして、私たちに「わかってくださいよ」と親鸞聖人は訴えかけているというふうに思います。いいですか、わかりますか。

そうするとこれまで申し上げたように、なぜ龍樹と天親をひとつにしたか、それはひとまとめにして菩薩と見たからです。そして天親菩薩の最初の信仰告白はあくまでも信仰告白だから、行として確立したのは曇鸞大師だから、曇鸞大師の「五念門」ということをきちっと押さえて、「大行とは無碍光如来の名を称する」ということですよと、いうふうに親鸞聖人は着地しておられるのだと思われます。

ちょっと、ややこしいことを言わないでもよかろうと思うかもしれませんが、それが『教行信証』というものですから、親鸞聖人の手法をいただきながら、親鸞聖人のお心持をいただいていくと。そこにまあ、何度も申し上げますが、私たちが凡夫のまま救われていくということがはっきりしてきますから、「なかなか、親鸞聖人有難いな」と思うと同時に、「まあよくこういうことをなさるな」と。「並の人ではわからない、こんなことをしても」と思います。ちょっと休憩しましょう。(休憩)

## 講義 2

それでは、もうしばらくお話をさせていただきます。なんだかすみません、ややこしい難しいことを言っていますが、龍樹、天親、曇鸞までで1000年くらい経っているわけですから(笑)、その間の変遷を踏まえて申し上げている。つまり親鸞聖人はそれを踏まえてお書きになっているわけだから、今のような手順を取りながら、それぞれの祖師たちを尊敬しながら、しかし凡夫がそのまま救われる行は曇鸞大師がはっきりしてくださったのだと。それが大事なのですよと。世親菩薩がまず初めに信仰告白としておっしゃってくださったけど、それが『大経』の行だと言って着地して下さったのは龍樹菩薩がお生まれになって1000年くらい経っての曇鸞大師なのですよと。こういうことが透けて見えてくるわけです。

これは、やはり僕らのようなあまり勉強していない者は、足元にも及ばないほど親鸞聖人の学識が深いから、まあ、それは目を見はるばかりです。そしてわかった時は、「そうか！」と思って、まあそれは夜寝られなくなります、感動して。「親鸞という人は偉い人や」と。「こんなことまでして教

えてくださっているのか」と思っているわけです。

それで今申し上げましたように、浄土教は『大経』から出発している。それを忘れないでください。そして世親の「帰命尽十方無碍光如来 願生安楽国」という表明を、今言った「凡夫が救われる行」にまでした曇鸞大師のところに、その着地点があるのだと。だから親鸞聖人は、これまで何度も申しあげましたが、曇鸞大師をととても大事にされますね。「曇鸞」という「鸞」だけは最後まで残しますね。「親鸞」の「親」(世親＝天親)は削っても、例えば、一番最低削るのは「悲歎述懐」のところですけども「悲しきかな、愚禿鸞、」(東聖典251頁、西266、島12-93)ですね。曇鸞大師の「鸞」だけは残すわけです。それは「悲しきかな、愚禿鸞」。凡夫のままで救われるからだ。だから曇鸞大師が有り難いんだということを最後まで貫いていくのが親鸞聖人だと思います。

その曇鸞大師のところから出発して、『大経』が、今度は『観経』に転換していきます。それは先ほど申し上げましたように、末法の世が近づいて来た。そして世相を見るとお釈迦様が言うた通り、まあひどい状況になって来た。これからどうしたらいいのか。こういう時代と、そこに生きる凡夫の悲しさ。そういうことの方が仏教の喜びよりも大きくなって、それをもとにして説かれるのが『観経』だから、曇鸞大師以降、特に、道綽、善導のところで、その『観経』に立って浄土教が浄土教という意味をますます発揮して来ることになります。『大無量寿経』は今まで勉強したように菩薩道の経典としても読めるし、凡夫が救われる経典としても読める。阿弥陀如来は根源仏だから、すべてを包むという大きな仏様として端を発しているけれども、それが、今度はますます浄土教という意味、凡夫が救われるというところに特化して説かれていくのが浄土教の特質になります。特徴になりますね。ですから道綽以降、この『観経』にのっとって浄土教が展開していくことになります。

そして申し上げますけども、先に申し上げておきましょう。『大経』は「あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。」(東聖典44頁、西41、島1-39)というふうに、どちらかという信心に重きがある。だから「聞名」、名の意味を聞く、そこに重きがあるから、行ということは、もちろん「無量寿仏の名(みな)を称する」とか、「称名念仏する」という言葉はたくさん出て来るけれども、どちらかという信心の方に中心があって説かれている。それに対して『観経』の方は、今度は「凡夫がどうしたら救われるの？」ということがあるから、それはこうなさいというふうに行が明確に示されていくことになります。

それが皆さんよくご存知の、先に指摘しておきましょう、118ページ、これは『観経』になります。特に『観経』の、まず「下品上生」(げほんじょう)のところに、ちょっと読んでみましょう。

「仏、阿難および韋提希に告げたまわく」。お釈迦さまは阿難と韋提希にこのように説きました。「「下品上生」というのは、あるいは衆生ありてもろもろの悪業を作れり。方等経典を誹謗せずといえども、かくのごときの愚人、多く衆悪を造りて、慚愧あることなし。命終わらんと欲(す)る時に、善知識の、ために大乘十二部経の首題の名字を讀むるに遇わん。かくのごときの諸経の名を聞くをもってのゆえに、千劫の極重の悪業を除却す。

智者また教えて、合掌叉手して、南無阿弥陀仏と称せしむ」(西113、島2-26)。ここに出てきます。私たち凡夫は、悪いことをして仏様に背いて生きているにもかかわらず、カエルの面の何とかのように知らん顔しとると。どうにもならんと。そのことを善知識が教えて、「合掌しなさい」と。そして「南無阿弥陀仏と称えなさい」というふうに教えていく。ここに「南無阿弥陀仏と称せしむ」という言葉が出てきます。

もう一つ出てきます。これは皆さんよくご存知の「下品下生」(げほんげしやう)のところに。ですから下品上生と下品下生、つまり「下品」というところに貫いて出て来ると考えてもいいと思います。最初と最後に出て来ますからね。この下品下生のところは皆さんよくご存知のように120ページ。ちょっと読んでみますよ。

「仏、阿難および韋提希に告げたまわく、「下品下生」というは、あるいは衆生ありて、不善業たる五逆・十悪を作る。もろもろの不善を具せるかくのごときの愚人、悪業をもつてのゆえに悪道に墮すべし。多劫を経歴して、苦を受くること窮まりなからん。かくのごときの愚人、命終の時に臨みて、善知識の、種種に安慰して、ために妙法を説き、教えて念仏せしむるに遇わん。この人、苦に逼(せ)められて念仏するに違(いとま)あらず。善友告げて言わく、「汝もし念ずるに能わずは、無量寿仏と称すべし」と。かくのごとく心を至して、声をして絶えざらしめて、十念を具足して南無阿弥陀仏と称せしむ」(西115、島2-28)。ここに「南無阿弥陀仏と称せしむ」と出てきますね。

このようにして『観経』の「下品上生」、「下品下生」に、凡夫が救われるためにはどうしたらいいか、一生悪を作つて、仏様に後ろ足で泥をかけて生きてるにもかかわらずけろっとしている。そして自分が正しいかのように生きてきて、人に傷つけ自分に傷つけているのは全部人が悪いと思っている。本当は自業自得で苦しんでいるのだ。それがどうしてわからんかなあと。いくら言ってもわからない、しょうがないから、最後にもう命終わる時に、「仏様のことを思いなさい」と言っても、もう痛くてどうしようもない。思えないと。そうしたら「南無阿弥陀仏と称えなさい」と、こういうふうには「凡夫の行」として『観経』では「南無阿弥陀仏」と言う。これは世親の『浄土論』の観仏とか見仏とかいうような難しいことが一切なくて、これは単純な話です。ここに称名念仏、念仏を称えなさい、それひとつでいいのだという行が『観経』に説かれているために、『観経』によって中国で仏教が展開していく時に、この「帰命尽十方無碍光如来」から出発したその行は、その意味を保ちながら「称名念仏」にまで展開していく。こういうことになっていきます。わかりますね。

そしてこれから勉強していきますが、その称名念仏の意味を決定的に決定づけたのが善導大師の「六字釈」です。これは先取りをして恐縮ですが、これは金字塔と言つていいような善導大師の了解ですから、もちろん当然のことながら親鸞聖人はそれをちゃんとお引きになります。176ページの終わりから2行目のところ。ここは印をつけてくださっていいところですよ。ここに善導大師がこうおっしゃいましたと。「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり」(西169、島12-24)と。南無阿弥陀仏の「南無」というところには二つの意味があると。それは私たち凡夫が「帰命する」ということだと。それはそうですね、「帰命尽十方無碍光如来」から始まっているのですから、そうですね、私たちが帰命

するということだと。

そして世親菩薩が言うように、「帰命尽十方無碍光如来 願生安楽国」と。「発願回向」というのは、私たちが浄土に生まれたいと願うこと。発願すること。浄土に生まれることを願うことですから、だから善導大師はちゃんと『大経』の世親の了解を踏まえながら、「南無」には帰命と発願回向、これは世親の「帰命尽十方無碍光如来 願生安楽国」、これを踏まえて、この二つを踏まえて、こういう了解をするわけです。わかりますね。これは衆生の方に、私たちが帰命する、そして浄土に生まれたいと願う、こういう願いが起こる。それが南無阿弥陀仏の南無という意味ですよと、この二つの願いを、その後、「南無」と言うは、すなわちこれ帰命なり、またこれ発願回向の義なり」、ここまでですね。

南無阿弥陀仏の「阿弥陀仏」と言うは、すなわちこれ、その行なり。この義をもつてのゆえに、必ず往生を得、と」。こういう善導大師のこの言い方だけだとなかなか難しいんですけども、もう少し解説を加えると、南無阿弥陀仏と頭が下がった時に、私たちの衆生の方には「阿弥陀仏に帰命する」ということと「浄土に生まれていきたい」ということと、この二つの願いが起こります。これから阿弥陀仏の世界に生まれていきたいと、こうなるとね、どう言ったらいいだろうか、「まだ行ったことがない浄土にこれから行こうというような話とは違うのだ」ということが言いたいわけです。帰命したときに、すでに浄土が開かれているから、そうでしょう。帰命したときに名義によって、さっき言った浄土が開かれているから、浄土に生まれていきたいと思うのは、それは「身が凡夫だから」です。けども身が凡夫であっても帰命したときにすでに浄土が開かれていて、「ああ救われた」という感動が起こるでしょうと。それを実現するのが「阿弥陀仏」なのですよというふうに、この阿弥陀仏の方が「帰命」と「発願回向」の二つの願いを実現する行なのですよというふうな説明なのです。解説なのです。こちら側（「南無」）は衆生の「願」であり、こちら側（「阿弥陀仏」）も衆生の行であると。こういうふうに言って、願と行とが具足して（「願行具足」）、南無阿弥陀仏一つで凡夫のまま救われて、しかし、身が凡夫だから浄土に生れたいという願いはずっと持つのだと。けどもそれは行ったことがない浄土に行こうというんじゃないんだと。もうはっきり浄土がわかっている。だけど凡夫だから命終われば必ず浄土に帰る。行き先はわかっていると。そういう願いを起こすことを全部満たしてくれるのが阿弥陀仏だから、これが行なのですよと。

あの、またつまらんことを言いますが、寺川（俊昭）先生とよく、よくじゃない毎日のように祇園に連れて行っていただいていたいました。寺川先生とつまらん話なのですが仏教の話なのですよ。つまらんことを言いながら仏教の何かを言っているわけです。祇園に行くといっぱい店があるでしょう。「延塚さん、行ったことがない店に行くのはどうも気が進みません」。高いですからね、京都は。「だから行ったことがないところは無いのと一緒ですな」。そうすると何百軒とあっても行きつけの二、三軒くらいしか気が休みせん」というようなことを言って、これを言っているわけです。行ったことがない浄土には不安で行かれない。そんなのではないのだと、初めから行ったことがあるところだから気が休まるのです。気が休まっている「発願回向」というのがあるのだと。それは凡夫だから、いくら仏様の世界がわかっても凡夫だから、これから先命終わるまでやっぱり仏様の世界に帰りたい

い。こういう願いは持ち続ける。それはしかし、行ったことがないというところではないのですよと。行ったことがあるところなのですよ、という話を飲み屋でやって、今度は出てきたときにそういう訳ですよ。「行ったことのない店は無いのと一緒ですな、行ったことのあるところは落ち着く」と言って、こう言うことを言おうとするわけですよ。

まあ、そんなことばかりやってまして、「先生は面白いな。ああ「六字釈」言うてるわ」と思って聞いたことがありました。要するにそういうことです。ですから「南無」は衆生の願を表し、「阿弥陀仏」は行を表して、「願と行とが具足しているから南無阿弥陀仏一つで凡夫が救われるのですよ」と言うのが、善導大師の「六字釈」の意味なのです。

それはね、中国にはたくさんの学派がありまして、日本でも法然上人が「念仏ひとつで救われるのですよ」と言ったら、明恵が「そんな馬鹿なことがあるか」と言いましたね。それはどこでも一緒です。善導大師が「南無阿弥陀仏一つでいいのです」と言っても「そんな、馬鹿なことがあるか」と言ったのが『撰大乘論』を中心に勉強している「撰論学派」という人たちですが、これは聖道門と考えたらいいです。

その人たちが「南無阿弥陀仏一つで救われるはずがない。それは浄土に生まれたいと、凡夫だから、浄土に生まれたいと願いは認めましょう」と。だけど、「南無阿弥陀仏というのは行ではない。あんな称名念仏なんて。行というのはちゃんと修行するということだ」と。「こんなもの行であるか」と言って、願は認めても行ではないと。百歩譲って、願の方は認めても行としては認められないと。行としては「止観行」が中心なのだ。それは当たり前やね、菩薩道は。そう言うふうな非難を受けたために、その非難に答えるために、この非難は、これは凡夫を仏教に向かわせるために、明恵と一緒に、方便で称名念仏しなさいと。そして浄土に生まれさせて、浄土で長い間修行させて、そしてやがて覚りを与えるのだから、だからすぐに覚りが与えられるのではなくて、これは浄土に生まれて、しばらくそこで修行をして、そしてやがて凡夫を覚りに導くのだという意味で「別時意の念仏」、別の時に凡夫を救うという意志があると言う方便なのだ。というのが、明恵と全く同じ非難が中国でおこるわけです。

ですから善導大師はその非難に答えて、「そんなことはない」と。「願と行とが具足しているのだから、南無阿弥陀仏一つで仏様の覚りをいただけるのだ」と。ただ、身が凡夫だから、浄土に生れたいと、願は一生続けけれども、南無阿弥陀仏一つで救われていくというのが『観経』で説く南無阿弥陀仏の行なのだというふうに説いたのがこの「六字釈」です。ですから「願行具足」という形にはなっていますが、これはよく見ると世親の『大経』で言った「帰命尽十方無碍光如来 願生安楽国」ということを踏まえて、そのまま凡夫が救われる行であるというふうに、南無阿弥陀仏の行を六字釈としてまとめたのが善導大師です。だから浄土教の行として決定的に着地させたのは善導大師であると考えられます。そしてその行を法然上人が引き継いだ。だから「ただ念仏して弥陀に助けられなさい」というふうに親鸞聖人は教えられた。「南無阿弥陀仏一つでいいのだ」ということを教えられた。

ところがさっき言った明恵から「南無阿弥陀仏で何で救われるのか、こんなものは凡夫の方便の教えではないか」と、こう言うから、親鸞聖人は



「何を言うか」と。「これは、もともと『大経』から出発しているでしょう」と言って『教行信証』では『大経』から出発している教である。そして「帰命尽十方無碍光如来」というのは光明智相と妙義相応と、これによって凡夫が凡夫のまま救われるとあるじゃないかということが言いたいわけです。だから親鸞聖人は、善導大師、法然上人を通して南無阿弥陀仏一つを教えられたのだけれども、それが非難されたために、もう一回もとに帰って、『大経』の「帰命尽十方無碍光如来」。「大行とは無碍光如来の名を称することである」と。ここに凡夫のままで救われるということがちゃんと整っている。それをちゃんと善導大師は言っているでしょうと。こういうふうには、七祖のところの中心は「帰命尽十方無碍光如来」と「『大経』による行」と「『観経』による南無阿弥陀仏の行」、これが浄土教の決定的な行になります。その中間にいるのが道綽ということになります。

それで道綽禅師は立派な方で『涅槃経』の素晴らしい学者でした。『涅槃経』というのは長い經典で、お釈迦様がお亡くなりになる時に『涅槃経』を説くわけですが、お亡くなりになる時に有名な言葉があるでしょう。親鸞聖人が引用しているでしょう。もう涅槃に入るという時に、「私は阿闍世のために涅槃に入らない」(東聖典259、260頁、西277、278、島12-100、101)と、訳のわからないことを言うわけです。何を言っているのやと。今、死んでいこうとしている人が何で涅槃に入らないというのか、それは何のことやというのが大いなる疑問なのです。ですから、そういうことが何のことなのかというようなことを研究している大いなる学者でした。

ところが曇鸞大師がいた中国の玄中寺というところにお参りになった時に、玄中寺の石碑に、今はないのですが曇鸞大師の業績が書かれてあった。そこに曇鸞大師という方は「四論の学匠」であったと。四論の学匠というのは、龍樹のさとりを研究する学問です。『中論』、『十二門論』、『百論』、『大智度論』、これが「四論」です。ですから龍樹の思想を全部研究する、そういう素晴らしい学者として有名だったわけです。その曇鸞大師が皆さんご存知のように、この『大集経』という經典を註釈しようとして命が短いから、何とか命を長らえる方法を揚子江を渡って南の方へ行って、陶隱居という仙人から「命を長らえる法を授かった」と言って意気揚々と洛陽の都まで帰って来て、そして菩提流支三蔵に向かって、「どうや、命を長らえる法をおれはもらって来たのだ、仏教にこれに勝る法があるか」と言ったら、菩提流支三蔵が馬の上からペッと唾吐いて、「お前の命を長らえるというのは、それは今で言えば臓器移植みたいなもので、自分の物理的な命を長らえるという話でしょうと。それは迷いを重ねているだけでしょうと。本当の命である「無量寿」というものに目覚めなさい」と言って唾を吐きかけるのです。曇鸞大師はこたえたのです。今まで一生懸命に修行して、陶隱居という人はなかなか難しい人で、弟子も取らなかった人らしいけど、弟子を取って自分の秘密の仙經を与えたというのはよほどのことだったのです。それを持って意気揚々と帰ったら「迷いを重ねているだけだ」と、そんなものは。それはそうですよ。今で言えば臓器移植みたいなものですからね。

何時か申し上げましたかね、僕は家内と温泉に行く途中に薬局に入ったら、薬局の頭のおじちゃんが出て来て、頭はげてるのですわ、そのおじちゃんが自慢らしく言うのですよ。「俺は心臓移植したんや」と。「へえ、お元気ですね、どうもないですか?」と言ったら、「おお元氣や、

どうもないぞ俺は。心臓移植してもう3年になる。」「はあそうですか、それはよかったですね」と言ったら、「ああ」言うて、えらい意気揚々としているから、ちょっとムカツとしたから、「それでも死ぬぞ！」と言ってやりました。そうしたら「ええっ！」と言っていましたけど(笑)、「おうそうか、それでも死ぬぞ」と言ってきた。そういうことよ。「生死を超える」ということになっていない。「生死を超える、死んでも生きた命だ。そういう命に目覚めなさい」と言われて仙経を焼き捨てたのよ。そこに「雑行を棄てて本願に帰す」と言わなくても、「雑行を棄てて本願に帰す」というのは思想的な表現だからなかなか難しい、何を言っているのかわからない。けど「仙経を焼き捨てた」と同時に、「自力をそこで焼き捨てた」のだと。よくわかる。だから曇鸞大師の行実だけは「高僧和讃」に歌っている。よくわかるから。だからそういう形で曇鸞大師は目覚めていくわけです。それが碑文に書かれていて、「四論の学匠」であった曇鸞大師が自分の自力を捨てて、そして浄土に還帰したのだと。帰したのだと。そしてあらゆる人にそれ以降、浄土を勧めて、ここで「みんなから尊敬されて命を終わっていったのだ」という碑文を見て、道綽は泣き崩れるわけです。

すごい人がおると、おれは今まで学匠やとか学者やとか言われて威張ってきたけど、ただの凡夫に帰って救われたと。「そうや！」と言って、道綽は初めて、そこで曇鸞大師に帰依して、そして玄中寺にとどまって、「四論の講説さしおきて」(「高僧和讃」東聖典491頁)、『涅槃経』の学問を捨ててしまって、そして初めて『観経』によって、学者の前に凡夫です。どんな偉い人でも、それは職業みたいなものはたまたまご縁があつてそうだったので、みんな一皮むけば凡夫です。その凡夫に帰って救われるということが、この浄土のこの末法の世の必然的な仏道なのだと、だからそれがはっきりしなければ仏道にならないと言って、道綽禅師は、これは大事な文章で、親鸞聖人が引用しているのですが、たまたま今開けました359ページ、これは『安樂集』に道綽が引用している文章です。ですからここは道綽の引用にはなっていませんが、359ページの終わりから3行目のところ、「『大集経』に云(のたま)わく」(西417、島12-190)とありますね。『大集経』というのは、これは経典ですから、お釈迦様がそう言っているのですよ。「お釈迦様がちゃんと言っているでしょう、経典に」と。そこにこう書いてある。「我が末法の時の中の億億の衆生」、末法に生きる人はどんな人であってもという意味です。「行を起こし道を修せん」に、わかりますね。発菩提心を起こして仏道に立って、行を修めようと思っても「未だ一人も得るものあらじと」、ちゃんとお釈迦さんはこう言っているのです。末法になったら、自分から発心して、修行して、そして仏道を全うするなんてあり得ないと。「当今、末法にしてこれ五濁悪世なり」。今は末法で五濁悪世である。だから「ただ浄土の一門ありて通入すべき路なり」と。浄土門だけが凡夫が救われる道であると。

この文章、この『大集経』の言葉を根拠にして道綽禅師は、末法になって修行をしたとしても、前にも言いましたね、仏様の覚りを求めると言っても仏様の覚りは深くて意味がわからない。「理深く解微」だと。だからいくら「覚りや、覚りや」と言っても、それは私たちの勝手な憧れだと。それではいけませんから、お釈迦様に遇って聞きたいけど、お釈迦様はもう死んでいない、というふうに、一つはお釈迦様がお亡くなりになってしばらく時間が経って、仏教がどういうことか、覚りがどういうことか、全くわからなくなった。末法になった。この二つによって、末法の凡夫に、もし仏道が

あるとすれば、『大集経』でお釈迦さまが言っている通り、「浄土の一門だけが通入すべき道なり」と言っている。

これはお釈迦様の経典だから、お釈迦様が言う通り、末法には聖道門は成り立たないのだと言って、聖道と浄土と二つに分けて、聖道門は末法では絶対に成り立たない、浄土門だけだというふうに、大乘仏教を聖道と浄土の二つに分けた。これが道綽禅師の大きなお仕事です。同時に末法になれば浄土の一門だけしか道にならないと、明確に浄土教を独立させた。これは法然上人のお言葉によると「浄土門を独立させた」のです。ですから皆さんご存知の通りです。毎日勤行をしてるではないですか、「正信偈」。「正信偈」は206ページ、この「正信偈」の通りですよ。206ページの終わりから4行目のところ。ここに「道綽、聖道の証しがたきことを決して、ただ浄土の通入すべきことを明かす。万善の自力、勤修を貶す」(西206、島12-52)。貶す、おとしめる。自力こそ仏道の修行をおとしめるのである。「円満の徳号、専称を勧む」。すべてが円かに備わって、仏様の方から備えて下さった名号こそ、その名号をもっぱら称えなさいと勧めてくださった。

そして「曇鸞大師の三不信の教えを「三不三信の教え」として丁寧に懇懇に教えてくださって、「像末法滅」、像法の人末法の人滅法の人必ず救われるというふうに浄土の一門を明らかにして下さった。一生悪を作ったとしても弥陀の本願の誓いに遇わなければ、安養界にいたりて浄土に生まれて妙果を証せしむ、一生悪を作って、弘誓の本願に遇って、浄土の安養界に至りて大涅槃の覚りを最終的に超証す、頂くのである」。これを道綽が明らかにして下さった。これに尽きるわけです。けども大乘仏教を聖道と浄土に分けて、浄土の一門だけが通入すべき道なりとはっきり言い切った。それも経典として言い切ったから、道綽は思想的には浄土門を独立させたのだというふうに法然上人はおっしゃっています。そうだと思います。初めて道綽禅師が「大乘仏教の中で末法の世において本当に救われる、入ることの出来る道は浄土しかない」と言い切ったのだから、だから中国で浄土門を独立させたのは道綽禅師であると言って、法然上人は道綽禅師を大変尊敬するわけです。

その道綽禅師の引文を見ますと、「行の巻」の引文に帰りましょう。あまり時間を取ることができませんが、171ページ、『安楽集』に云わく、『観仏三昧経』に云わく、(西159～、島12-19)とあって、皆さんこの文章を追ってくださいね。時間がないので私訳しますよ。お釈迦様が父親の浄飯王に勧めて念仏三昧をなさいとこう勧められた。そうすると浄飯王はお釈迦様に次のように言いました。仏の最終的な果徳、仏が到達する果の悟りは真如実相である。それから第一義空である。だから仏の真如実相とか空とかということをお教えたらいいいのに、どういう理由によって、弟子をして「念仏をせよ」というのかと、こういうふうに父親がお釈迦様に聞いた。そうするとお釈迦様はお父さんにこう告げた。「諸仏の果徳、無量深妙の境界、神通解脱まします」。あなたが言うように諸仏の立っておられる覚りは、深い空の覚りであって、これは天才的な解脱によってしか得ることができない。「これ凡夫の所行の境界にあらざるがゆえに、父王を勧めて念仏三昧を行ぜしめたてまつる」と。わかりますね。空を覚れとか、真如実相を覚れとかそんなものは凡夫が果たされるようなものではないから、だからお父さんに念仏三昧をなさいと勧めたのであると言うふうにお釈迦様が答えます。

そうすると今度はお父さんの方がお釈迦様に「念仏の功、その状(かたち)いかんぞ」と。念仏しなさいというが念仏の功德というものはそれはどういうものかというふうにお釈迦様に聞くと、お釈迦様はお父様に「伊蘭林の方四十由旬ならんに、一科の牛頭栴檀あり、根芽ありといえどもなお未だ土を出ざるに、その伊蘭林ただ臭くして香ばしきことなし。もしその華菓を瞰(たん)ずることあらば、狂を発して死せん。後の時に栴檀の根芽ようやく生長して、わずかに樹に成らんと欲す。香氣昌盛にして、ついによくこの林を改変してあまねくみな香美ならしむ。衆生見る者、みな希有の心を生ぜんがごとし」。わかりますね。

この伊蘭林と言うのは臭くてたまらないものらしい。ここにも書いてあるように、もしその実を「嘆ずる」と言うのは舐めることですが、その実をなめたら気が狂うか死ぬかです。それくらい臭い、そして四十由旬、一由旬と言うのは四十里だから、十由旬と言うと四百里です。その四百里平方の大きなところに伊蘭林が全部生えている、臭くてたまらない。その中にたった一つだけ牛頭栴檀という草がある、これは土の中にあつたまだ芽が出ていない、この芽が出た途端に伊蘭林が改変されて、ものすごくいい香りに代わると。こんなことは常識では考えられないから、人間の頭ではよくわからないけれどもそういうことが起こるのです。それと同じ功德が念仏にはあるのですと。わかりますね、私たちの三毒五悪の臭い伊蘭林に、たった一つ念仏の芽が出ただけで、それがころっとひっくり返されて、念仏に生きていこうという人間に改変していくというそういうはたらきが念仏にあるのですよと、こういうふうにお釈迦さんが言うわけです。

そして「仏、父王に告げたまわく、「一切衆生、生死の中にありて、念仏の心もまたかくのごとし。ただよく念を繋けて止まざれば、定んで仏前に生ぜん。ひとたび往生を得れば、すなわちよく一切諸悪を改変して大慈悲を成ぜんこと、かの香樹の伊蘭林を改むるがごとし。」言うところの「伊蘭林」は、衆生の身の内の三毒・三障、無辺の重罪に喩う。「栴檀」と言うは、衆生の念仏の心に喩う。「わずかに樹と成らんと欲す」というは、いわく、一切衆生ただよく念を積みて断えざれば、業道成弁するなり。」

要するに、一切衆生に、この三毒五悪を生きる、臭い伊蘭林を生きる衆生にただ念仏しなさいと、そして念仏を積み重ねていけば必ず今言ったように改変されて、牛頭栴檀の香り豊かな世界に変わるのだと。だから念仏せよと言っているのですとお釈迦様が答えた、と言うわけです。

これ、何時まででしたかね。時間がない、しょうがない。次のページをちょっと開けてください。この後、ずっと念仏がどんなに優れていかということが繰り返されてくるのですが、その時に道綽に引文は全部、いいですか172ページ最初から3行目、ここに、「もし人、菩提心の中に念仏三昧を行ずれば」、これが道綽の行なのです。行の表現なのです。その3行後、「もし人ただよく菩提心の中に念仏三昧を行ずれば」とありますね。その2行後、「もしよく菩提心の中に念仏三昧を行ずれば」とありますね。その次の行、「何がゆえぞとならば、よくこの念仏三昧を念ずるは、すなわちこれ一切三昧の中の王なるがゆえなり」とあって、道綽がまだ『観経』によって称名念仏を言っていない、「念仏三昧」と言っている。その後ずっとそうです。172ページ終わりから3行目、「もしよく常に念仏三昧を修すれば、現在・過去・未来の一切の諸障を問うことなく、みな除くなり」。これも念

仏三昧です。わかりますね。そうすると、親鸞聖人のこの引文を見ると、道綽は173ページの真ん中へんからちょっと後まで道綽です。

ところがこの道綽の引文を見ると、先ほど申し上げたように浄土教を独立させたのは道綽なのだけけれども、「行」ということになると全部「念仏三昧」で統一されている。わかりますね。今日はもう時間がないので、ですから行としては十分に確立していない、浄土教としてはね。浄土教として行を確立したのは、さっき言った善導大師です。だから道綽の「浄土教独立」と善導大師の「行の確立」によって浄土教が決定的に完成したのだと言うのが親鸞聖人の見方なのです。そして、それを継承して法然上人は、「私はもっぱら道綽、善導によって浄土教を述べるのだ」と言ったのが法然上人です。そんなふうな展開になっている。この引文の仕方から見てね。もし興味があれば帰って『安楽集』を読んでごらんください。『安楽集』を読んでみると確かにその通りです。念仏を「南無阿弥陀仏と言う」のは出て来ない。全部「念仏三昧」で出てきます。だから親鸞はすごいなあ。道綽は念仏三昧と言ったのだと。この次にその意味と、それからもう一回善導大師のところを言って、この七祖の善導大師のところまで終わらしましょう。

## 質疑応答

**質問1**・・・道綽さんが言われている念仏三昧と言う念仏は南無阿弥陀仏なのでしょうか。

**先生**・・・『安楽集』を読みますと「阿弥陀仏の名(みな)を称する」という言葉は何度も出てくる。しかし「南無阿弥陀仏」という言葉が出て来ない。そして「念仏三昧」というと、やっぱりどうしても「三昧」と言うのが付いているから、「三昧」というのは菩薩行で言えば「定」。坐って、三昧、境地に入ってそして仏を観ると言うニュアンスが強いわけです。そういう意味からすると称名念仏の善導大師と曇鸞大師のちょうど中間的な位置に道綽があるために、どうしても、道綽の背景に菩薩道で実現すべきことが実は念仏によって実現するのですよと、こういう言い方になっているために、つまり、菩薩道を包むためにあえて「念仏三昧」と言ったと思われれます。そういう意味からすると、まあすごい配慮をしながら道綽が伝えようとしているなと思いますけれども、さっきの質問から言うと、どっちかわからない。称名念仏なのか、それとも三昧に入って仏を観るといことなのかどっちかわからない。むしろ『安楽集』を読むと、念仏を称えたと阿弥陀如来が前に来るとか、念仏を称えたと阿弥陀如来を観るとか言うことが何度もくりかえされるから、

質問1・・・『安樂集』では、「念仏を称え」と書いてある。だから何らかの念仏があるわけですね。

先生・・・そうです。だから、念仏を称える効能として書かれているところに、その念仏を称えたらどうなるか、それは阿弥陀仏が前に現われるよとか、諸仏と一緒に迎えに来るよとか書かれているから、まるで阿弥陀仏を観ることなのかと了解できる方が多いのです。そういう意味では称名念仏と言うふうに決定していない。ちょうど中間的にあって、まあ、配慮から言うと菩薩道を包んで、この末法で浄土門一門だけですよと言うのだから、聖道門の人たちもこっちに来いやという意味があるのだと思うけれども、それを包んで、定と、三昧というところに力を置いていると思われま。それがさっき言った時代時代の状況の枠組みだと思います。そういう意味で道綽は念仏三昧で親鸞聖人は全部統一している。この引文の仕方はやはり見事です。親鸞聖人は道綽は念仏三昧ということで統一して、南無阿弥陀仏というところまで着地していないと。これが言いたかったと考えられます。

質問2・・・今、道綽が念仏三昧ということで、口称念仏、南無阿弥陀仏というところまでは着地していないと言うお話がありました。ただ、訳のわからんことをお尋ねするかもしれませんが、この念仏三昧という言葉はある種積極的に理解することはできないでしょうかと言うお尋ねです。

先生・・・出来ます。

質問2・・・出来るということですから、それをお伺いした方がいいのかもしれませんが、このお尋ねのもとにあるのが、「大行とは無碍光如来のみ名を称するなり」という、これを大行と親鸞聖人は言っておられるのですが、その主体はなんであるか。大行の主体ですね。主体といったときに行者として想定されるのが普通念仏申す人間なのです。しかしそうだといきれないものが当然あるわけで、そこに重要な意味があるだろうと思うわけですね。そうするとそういう世界と言うのはどうして実現されるのかと言うことがあるわけですね。それは「諸有衆生、聞其名号、信心歡喜」、「本願成就文」という、そこに「聞其」という、「その名号」という17願海というのが捧まれるということがあって、癒されるということがあって、そこに先生が言われる凡夫ということが実現されていくというか、その世界から南無阿弥陀仏と言う世界が本当に仰げると言うか、そういうことじゃないかと思うわけですね。そういうふうに頂いて見ると、これはひとつの三昧と言うとわざとらし過ぎるかもしれませんが、大きな世界があるのだと、そういうことを道綽は言いたかったのかもしれない。

先生・・・そうですね、先生のおっしゃることわからないではありません。そう言う広い意味があって、三昧の意味を今言ったように念仏の主体を限定しないで、例えば念仏の主体は如来だということもできるし、それを受け取った衆生の行だということもできる。どっちも言える、大行と言った時には、これは如来の行だということも言えるし、さっき言った本願の成就ということから言えば衆生の行だとも言える。その主体をどっちとも包んでいるような大きな意味があるために念仏三昧と言っているんだと。こういう意味ですか。

**質問2**・・・そういう意味ですね。

**先生**・・・それは、その通りだと思います。ですから念仏三昧ということに、僕は今念仏三昧を否定的な意味で申しあげましたが、念仏三昧を肯定的にとらえることもできます。なぜかと言うと、そのひとつの例をあげましょう。

『観経』は「一経両宗」と。ひとつの經典なのですが二つの宗があると言われます。そのひとつは「観仏三昧」です。これは先ほど言いました十三観のところでは、『観経』では座禪を組んで浄土を観るという観仏三昧。定善十三観を中心だとみる時には、この観仏三昧が中心になる。そうになるとそれは聖道門の見方になります。それに対して、もうひとつは、ここで「念仏三昧」という言葉が出てきます。一経両宗と言う時には、この二つがあるのだと。もちろん善導大師はこの念仏三昧の方に立って、さっき言った称名念仏というところに着地するわけですから、そういう意味で念仏三昧と言った時には観仏三昧ではないのだという、こういう肯定的な意味もあって、その場合になぜ三昧と言うかと言うと、やはり念仏を称える衆生のところに如来の世界が開かれてくるようなそういう大きな出来事が起こるから、それは人間の諸行を超えているから、それは三昧と同じ意味があるのだという意味で、あえて念仏三昧ということ言葉を肯定的にとらええることができるのではないかとおっしゃっているわけです。それはできる訳です。そういう意味も含めて道綽は念仏三昧で統一していると考えてもいいと思います。

**質問2**・・・道綽にはそういうお心があられたということですね。

**先生**・・・あったと思いますね。おっしゃるように、普通は、念仏だと称名念仏、これは衆生の念仏なのだから、念仏して救われるわけがないじゃないかというのが常識なわけです。ところが念仏によって仏様の世界が開かれるのだと。これは聖道門で言えば三昧に入ったと同じだと。だから称名念仏でも念仏三昧と言うのだと。こういうふうな大きな意味があるとおっしゃっているのは、僕はその通りだと思います。そして道綽禪師もそれを踏まえてこういう表現をなさったかもしれませぬ。いずれにしても善導大師の称名念仏に着地するまでの、まあ過渡期にある道綽は念仏三昧ということで統一していますよと、親鸞聖人が教えてくださっているのは間違いない。

**質問2**・・・余計なことですが、私は道綽が大好きで、どうしてもお尋ねしたかったのです。

**先生**・・・いやいや、いいご質問でおっしゃっている通りだと思うのです。

**質問2**・・・もうひとつあるのですが、時間の関係で他の方に譲ります。

**先生**・・・またこの次に。

**質問3**・・・すみません、私は信心を頂いたらこんな質問しないで済むと思うのですが、私は『観経』のことを細川(巖)先生からたくさん伺ってまして、「二種深信」はもう究極の信心だと思ってました。そしてあの毎日生活する中で鬼が生まれて、お念仏しながら生活しておりますけど、それが

『観経』の救いとは個人的な救いじゃないかと思うのです。そしてそれでは本願の救いになっていない、その延長線上に私たちの個人的救いというもの、そんなことも考えたのですが、これは質がちがうものですか。

先生・・・いやいや、あのね、僕は今おっしゃってくださっていることはよくわかります。僕の言葉で言い直していいですか。『観経』と言うのはある種体験的に、仏教が自分の身にどう落ちるか、その体験になりますね。ですから、そういう意味で皆さん、この中で仏教に触れたという体験をお持ちであれば、皆体験的なのです。ところが下手をすると、その体験にとどまってしまうのです。体験にとどまると、それは思い出に変わります。そして、もう一度あの体験をというように、夢に変わってしまう。そうではなくて、『観経』が言おうとしているのは、いいですか、体験から言えば「自力無効」の体験、これを言っているわけです。しかしこれはね、体験だけからいうと、わかりやすく言うと、皆さん例えば大病をしたり、うちの家内のように白血病になって死ぬかとかどうかということになってくると、もう、それはもうどうにもならない、そういう体験を通して初めて「ああ、仏様の世界があるのだ」ということを知らされるということはあるわけです。

ところがそれが体験にとどまってしまうと、今言ったように、それが思い出になってしまう。そして今生きてはたらくものにならない。どうしてもその体験のところに帰ってそれを言うとか、どうしてもあの体験をもう一度と思うから、自分の体をもう一度自分でいじめたりして、期待してその体験をもう一度と言うふうになってしまうわけです。

そうではなくて、いいですか、「機の深信」は「決定して深く、「自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫より已来(このかた)、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」と信ず」(東聖典215頁、西217～、島12-59)。これは体験的です。体験でもわかります。病気すればわかります。ところが善導大師はすぐに「法の深信」を言うでしょう。紙の裏表、その体験を通して、阿弥陀如来の本願に目覚めなさい。阿弥陀如来の本願は、いいですか、経典に説かれています、それは経典の中だけでなく、今そこにはたらいているのです。あなたに自力無効やということを知らせたのは仏様のはたらきでしょう。その仏様のはたらきの方に転じて、「法の深信」は、「決定して深く、「かの阿弥陀仏の四十八願は」、『大経』に説かれている四十八願の本願は、「衆生を摂受して、疑いなく慮(おもんぱか)りなくかの願力に乗じて、定んで往生を得」と信ず」と言うでしょう。そんなふうには個人的な体験を超えて、本願は一切衆生を包んでいるでしょう。その衆生を包んでいる本願によって往生に立ちなさいというふうには、本願に目覚めることがなければ個人の体験にとどまってしまう。とどまってしまうと思い出になるから、さっき言ったようなことになる。そうではない、その体験を通してどうしても本願のところまで展開しなければ本当の救いにはなりませんよと言うのが善導大師の教えです。

質問3・・・質が違うということになりますかね。

先生・・・そうですね。体験を超えた大きな意味をいただくことになります。この個人の特殊な体験を通して普遍的な意味をいただくことになります。その普遍的な意味を頂けば、いつでも、どこでも必ず「南無阿弥陀仏」と言うときには、本願の中にあるということがわかりますから、もう一度帰ら



なければならぬということにはならない。何時も本願と一緒に生きていくことになる。その「本願の法」、「普遍の法」に目覚めてください。これが善導大師の教えですから、その辺をよく考えて見られたらいかがでしょうか。

質問3・・・わかりました。ありがとうございました。

田畑先生・・・時間が来ましたので、今日はこれで終わりにします。先生ありがとうございました。

先生・・・どうもありがとうございました。(終了)